

不登校支援における天理教の社会福祉活動 (2)

天理大学人文学部准教授
深谷 弘和 Hirokazu Fukaya

前回(7月号)は、不登校の実態について整理した。不登校が生じる背景は、一人ひとり異なり、その原因は多面的である。いじめなどの人間関係をはじめとした不登校のきっかけとなる原因を解決したからといって、再び登校したり、社会参加したりすることができるようになるわけではない。不登校支援では、生きるためのエネルギーが低下した状態に対して、時間をかけて寄り添いながら回復するのを待つことが欠かせない。今回は、不登校問題に対する天理教の社会福祉活動を整理する。

天理教における不登校支援

天理教では、各地の教会長をはじめとした信者が、不登校に悩む本人、家族の支援をおこなってきたが、例として3つの取り組みを紹介する。

まず、天理教由利道分教会長の佐々木則夫氏が代表をつとめる「グレープネット・ゆり」の取り組みがある。「グレープネット・ゆり」は、秋田県を拠点に、現在はNPO法人として、自立援助ホームの運営や、子育て支援講座の開催など、子ども・若者の支援活動に取り組んでいる。不登校支援においては、通信制高校の由利明誠高等学院を設立し、支援をおこなっている。また、同法人の認定資格として、不登校支援相談員の資格を準備し、不登校支援に携わりたい人を対象に研修を開いている。研修は、定期的に天理市でも開催されており、天理教関係者が不登校に関する基本的な知識や、本人や家族に対する支援の姿勢を学び、不登校支援に携わっている。

天理教蘇我町分教会長の新田恒夫氏が代表をつとめるNPO法人「スペース海」も、これまで約30年にわたり、不登校支援をおこなってきた。千葉県を拠点として、不登校の本人や家族への相談活動、居場所や作業場の提供や、発達障害をはじめとした障害のある子どもへの支援をおこなっている。2021年からはYouTubeにおいて「不登校チャンネル／スペース海」を開設し、不登校の経験者のほか、親や支援者の声を発信している。天理教の信仰者としての不登校支援の経験についても、養徳社のYouTubeチャンネル「陽気チャンネル」や、天理教布教部のYouTubeチャンネル「天理の教えチャンネル」でも発信をしている。新田氏が取り組んできた不登校支援の内容や、信仰的な思いについては、本連載でも紹介した『子どものおたすけ—発達障害・不登校・虐待・イライラしない子育て法』(養徳社)にまとめられている。

天理教安東分教会では、教会の子弟である高部春菜氏によってフリースクール「みんなの教室」が運営されている。小学校の教員であった際に、不登校をはじめとして生きづらさを抱えている子どもに出会い、教員を退職の後、大分県別府市で初のフリースクールを教会で開設し、居場所支援をおこなっている。学校に行けずに、家で過ごす子どもの居場所を提供し、子どもが自らの気持ちを語れるまで待ち、家族や学校に子どもの思いを伝えることで、地域における子ども支援のネットワーク形成のハブとなっている。2024年2月26日～27日、天理教布教部の「ひのきしんスクール講座」において、「不登校～子どもの事情を通して～」が開催され、その活動内容が報告された。

不登校支援にみる天理教の信仰的態度

ここまで天理教内における不登校支援の例を提示したが、これらは一例であり、先述したグレープネット・ゆりの不登校支援相談員として活動している天理教関係者は少なくない。また、自分が不登校であったり、子どもが不登校であったといった自らの経験を活かして、不登校で悩む人をサポートする人たちもいる。先述した天理教ひのきしんスクールのパネルディスカッションのテーマは「子どもの事情を通じた私たちの成人」となっている。そこで最後に、不登校支援に関わる人たちは、どのような信仰的な気づきを得て、それを支援につなげているのかを整理する。

1点目は、不登校を通して、自らの当たり前にしてきた価値観を見直すことである。「学校に行けない／行きたくない」という子どもを前にした際に、「学校には行かなくてはならない」、「他の子どもと同じようにできなくてはいけない」、「嫌なことから逃げなくてはいけない」といった親や教師をはじめとした大人が持つ「当たり前」の価値観が現れ、子どもとぶつかってしまうことになる。しかしながら、生きるためのエネルギーが不足している本人に対して、登校することをはじめとして何かを強制することは、逆効果となってしまう。そうした中、先述の新田氏の著書では、教祖の「ひながた」が紹介されている。あらゆるものを施し、「貧のどん底」にある中で、「水を飲めば水の味がする」と語り、人間が親神によって、生かされていることへの感謝を示した「ひながた」は、不登校支援をはじめとした子どもの支援においては重要だと、新田氏は指摘している。

2点目は、不登校に関わる経験を、救済活動(おたすけ)に活かしていくことである。繰り返しになるが、不登校は、そのきっかけとなる問題が解消することで解決するわけではない。生きるエネルギーが低下した状態にある本人が、少しずつエネルギーを貯め、自らの思いを口にして、動き始めるまで、関わる人は、寄り添い、耳を傾け、共感し、伴走する。こうしたプロセスは、不登校に限らず、病気や障害、さまざまな悩みを抱えた人への支援に共通するものである。不登校を経験した本人であれば、その経験が他者に寄り添う際に活かされると捉え、不登校の親や支援者であれば、寄り添うことの難しさの経験が、自分を成長させてくれると捉える。信仰者たちは、子どもに寄り添うプロセスを教祖の「ひながた」に学び、陽気ぐらし世界の実現に向けて、自らの役割を自覚する契機としている。

前回も述べたように不登校は、その数は約30万人に達しているにもかかわらず、社会資源は少なく、支援につながないケースも多い。不登校という形でSOSを示す子どもを中心として、周囲の大人が変わっていくために、各地の教会の信仰者が仲介者となって、子どもを地域で支える社会づくりが進んでいくことが期待される。

ここまで16回にわたり、天理教の社会福祉活動について連載してきましたが、今回で連載終了となります。お読みいただき、誠にありがとうございました。